【街は素敵なミュージアム】

福生市史

悠久の時を語るものたち

数千年前からここで暮らしていた先人たちが残してくれた歴史という宝物があります。私たちが、悠久の時を超えた未来の人々に語り継ぎ、大事に受け継ぐために…。

【原始時代】

顔面把手（縄文時代・長沢遺跡出土）

深鉢型土器（縄文時代・長沢遺跡出土）

【鎌倉・戦国時代】

桃山時代の建造物の熊川神社本殿（東京都指定有形文化財・市登録有形文化財）

石製塔婆の長徳寺の板碑（市登録有形民俗文化財）

原始時代

福生周辺の地は立川ローム層という赤土で覆われています。これは、約2万年前、富士山の大噴火による火山灰が降り積もったものです。

この地に人間が生活を営み始めたのは約1万年前と推定され、それを裏付けるものとして、市内の福生不動尊遺跡から縄文時代早期の土器が出土しています。さらに、拝島段丘付近の長沢遺跡から、集落跡が発見され、そこで煮たき、貯蔵などに用いられた土器、食料採取のための根茎掘りに用いた石器などが多数出土しており、縄文時代中期（4000～5000年程前）には、拝島段丘で人々の暮らしが大規模に営まれていたようすがうかがわれます。

しかし、縄文時代後期には、人々は福生を離れて生活に適した地へと移り住んでいったようで、しだいに集落は縮小され、弥生時代の遺跡や遺物は現在にいたっても発見されておらず、生活の痕跡はありません。

律令制下では、武蔵国多摩郡に属していたものの、「和名抄」にみられる多摩郡10郷のなかで、福生市が属していたと推定される郷は定かではありません。このころの遺物としては、熊川地域で出土した平安時代の土器が唯一のものです。

福生という名が歴史にはじめて登場したのは、11世紀に入ってからのことです。武蔵七党・西党の小川氏の系図のなかに、宗末という武士が福生村を賜ったことが記されています。

鎌倉時代・戦国時代

中世の歴史を物語るものとしては、板石塔婆ともいわれる石製塔婆「板碑（供養塔）」が数多く発見されています。これは鎌倉時代から室町時代にかけて、追善や供養などの目的でつくられたもので、民間の信仰を知る資料として貴重なものです。なかでも、永昌院にある嘉元2年（1304年）と記された板碑が、市内に現存する年代の記された石の文化財では最古のものとされています。

さらに、長徳寺には建武4年（1337年）銘の板碑をはじめ永正2年（1505年）銘の阿弥陀一尊板碑にいたるまでの21点の板碑が保存

嘉元四年銘板碑（福生院・市指定有形民俗文化財）

北条氏照 制札（市指定有形文化財）

嘉元二年銘板碑（永昌院・市指定有形民俗文化財）

されています。中世の社会、文化生活を知る重要な遺物として、平成３年に新しく導入した市文化財登録制度により文化財として市の文化財台帳に登録されることになりました。

16世紀後半になると、この辺りは八王子城主北条氏照が支配するようになります。永禄４年（1561年）には「福生郷」内での乱暴を禁止する制札が発行されています。しかし、五代にわたって関東に勢力をふるっていた北条氏もやがては豊臣秀吉に滅ぼされ、近世を迎えます。

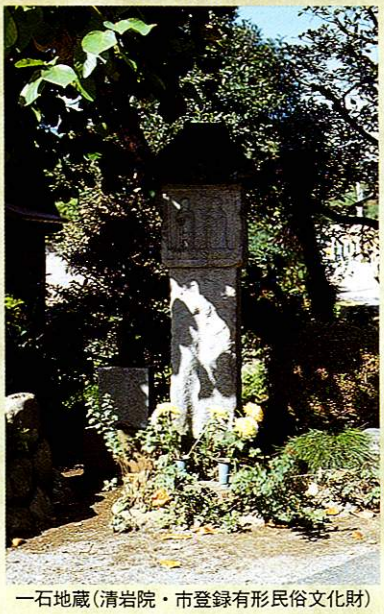
桃山時代の建造物としては、熊川神社本殿があります。東京都有形文化財に指定されている市内最古の木造建築物で、桃山時代特有の様式および技法による一間社流れ見世棚造り、目板打流し板葺と呼ばれる構造形式は、かつて奥多摩地方で盛行した同様式としては現存するもののなかでもっとも古く、かつ規模の大きいものです。文化財登録制度の施行により、福生市の文化財として登録されました。

【江戸時代】

牛浜出水図（藤雲嶺画・渡辺治衛氏所蔵・市指定有形文化財）

玉川上水旧堀跡（市指定史跡）

庚申塔（千手院・市登録有形民俗文化財）



一石地蔵（清岩院・市登録有形民俗文化財）

江戸時代

徳川家康の支配により、江戸が行政の中心となり、江戸周辺は発展します。そのころ、福生村は天領、熊川村は天領と旗本領に分かれて統治されるようになりました。

江戸時代の福生周辺のようすを描いたものに、地誌「新編武蔵風土記稿」がありますが、これによると、福生村は、東は中里新田および殿ケ谷戸村、南は熊川村、西は多摩川を隔てて下草花村、北は川崎、石畑に接する村で東西約30町（3.3km）、南北22町（2.4km）ほどあったことがわかります。さらに多摩川の源流から河口までの周辺の村々を克明に描いた「調布多摩川絵図」にも福生村、熊川村の名をみつけることができます。これは多摩川に架かる橋や渡し場、神社仏閣等の名所案内などを知るたいへん見応えのある資料です。

庶民の生活ですが、台地の地質により正保（1644～1647）のころまでは、耕地のほとんどが畑でした。農家では野良仕事の合間に、男は多摩川のいかだ流しや漁業で稼ぎ、女は機織りをしていたようです。その後水田の開発にも力を注ぎましたが、多摩川の氾濫にたびたび苦しめられ、地域によっては本格的な水田開発事業が進められたのは明治時代になってからのようです。

当時の災害のようすを鮮明に描いたものが「牛浜出水図」です。安政６年７月（1859年）の大雨による牛浜地域（現五日市街道沿い約500mの区間）冠水の惨状が描かれたものですが、当時の村の状況がつぶさにみて取ることのできる趣の深いものです。また福生の道

路の状況、各家の所在や屋号、世帯主の名など、村のようすの詳細な部分までみることのできる史料価値の高いものであることから、昭和51年に市の指定文化財になっています。

福生、熊川一帯は、尾張公のお鷹場でもあったため、鳥や獣の捕獲が禁止されていました。このため、農作物への被害も大きかったようですが、鳥獣駆除のために、鉄砲を使ったり、案山子(かかし)を立てることには許可が必要でした。

長徳寺には、富士山を信仰した講中の人々によって立てられた富士講碑(天保12年・1841年)や福生村長沢の人々が立てた庚申塔などの石碑が数多く残されており、庶民の信仰を知る上で欠くことのできないものとして市の文化財に登録されています。

明治時代・大正時代

大政奉還により新しい時代が幕を開け、明治維新による急激な社会状況の変化とともに、福生もさまざまな変遷をたどることになります。

明治4年の廃藩置県により、現福生は韮山県、品川県に属し、さらに翌5年には神奈川県に、さらに11年には神奈川県多摩郡となります。そして17年には福生、熊川、川崎、五の神、羽村による五カ村連合戸長役場がおかれるようになりますが、その後これは分裂し、明治22年の町村制の施行により、福生、熊川両村による組合役場が設立されます。そして26年には神奈川県から東京府の所轄に変わり、以来50年にわたり福生、熊川両村の村づくりが行われ、ようやく現在の形態へと落ちついてくるのです。

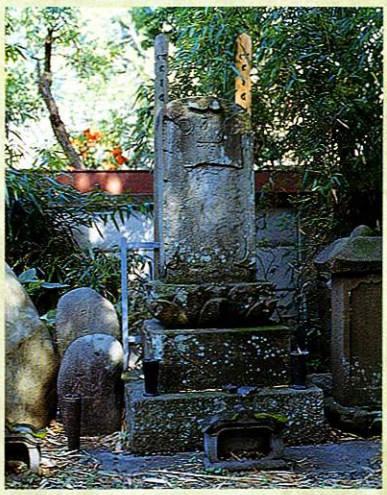
このころの福生の農業は、養蚕を中心に営まれるようになります。富国強兵の国策のもと製糸業が盛んになり、福生にも森田製糸をはじめとする製糸工場がふえ、地場産業として繁栄し、明治20年代から昭和初期まで最盛期を迎えました。このほか、水に恵まれた土地柄を活かして、江戸時代以来の酒造りも盛んになり、現在では東京の地酒の拠点としてその名が知られています。

教育面では、明治6年に福生第一小学校の前身として福生学舎が長徳寺本堂を借りて授業を開始しています。翌7年には、熊川学舎が福生院本堂を仮校舎(のち熊川神社に移転)にして授業を行うようになり、大正のころまで続きました。

やがて明治27年には青梅・立川間に青梅鉄道が開通し、福生駅が開設されます。大正4年には村に電気がともるようになり、同10年には電話がひかれ、街としての機能をもちはじめるようになります。さらに同14年には、福生・五日市間にバスが運行されるようにな

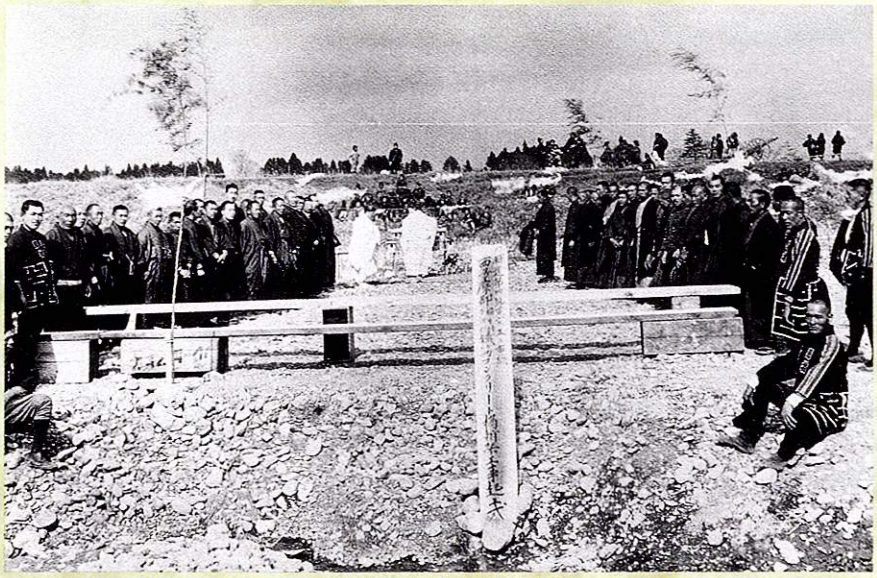
庚申塔(旧宝蔵院・市登録有形民俗文化財)

富士講碑(長徳寺・市登録有形民俗文化財)


旗本田沢氏の墓(真福寺・市指定史跡)

旗本長塩氏の墓(福生院・市指定史跡)

【明治・大正時代】


▲多摩橋の起工式(大正13年ころ)

開通したころの青梅鉄道(明治28年ころ)

地場産業として栄えた製糸業

り、五日市鉄道も開通。福生は西多摩の玄関口としての活況を呈してきました。

昭和時代

交通網が整いはじめるとともに、多摩名物のいかだ流しもしだいに姿を消すようになりました。青梅鉄道はさらに御岳まで延長されるなど、交通機能はめざましい勢いで発展していきます。

これにともない、人口も徐々に増え続け、昭和５年の国勢調査によれば、1024戸、6005人が福生に暮らしていることがわかります。昭和13年には東京陸軍航空学校(のちの少年飛行兵学校)が、14年になると政府により町の北部一帯の約200haが接収されて多摩飛行場になり、15年には陸軍航空整備学校が開設され、人口が増えました。

この間昭和15年11月10日には、歴史をともにしてきた福生村と熊川村が合併して「福生町」が誕生しました。当時の人口は7921人、養蚕の盛んな農業中心の町でした。しかし、16年の12月8日に、日本が対米英に宣戦布告し、太平洋戦争へと突入。静かだった福生もしだいに戦争の波にのみ込まれていきました。

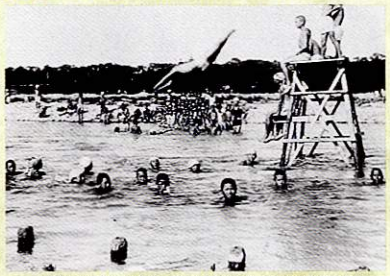
物資が配給制になり、ガソリンは軍需品とされたため木炭バスが走るなど、物不足になりましたが、農家が多かったため食糧などには比較的恵まれており、都心部から着物や電球などと野菜や米などを交換しに来る人も少なくなかったようです。

また、戦時下の影響はものばかりでなく、たとえば若い女性(14歳以上)が軍需工場などに勤労動員されるなど、福生町民全体にも大きな影を落としました。さらに19年ごろからは都会から次々と学童が疎開してくるなど、町は戦時下のなかであわただしい不安な日夜に明け暮れたのです。

昭和20年３月９日から10日夜半にかけて東京大空襲が、そして戦火はさらに広がり、4月には熊川地区にも爆撃があり、町民２人の死亡が記録されています。その年の８月、日本はポツダム宣言を受諾し、長かった戦争に終止符が打たれました。

敗戦は福生町を大きく変えることになります。終戦とともに日本の軍事施設は、米国にすべて接収されることとなり、福生にあった多摩飛行場も横田基地として米軍の管理下に置かれることになりました。戦後の福生は基地を中心に、基地労務者、サービス業などが急増。また、米軍ハウスが2000戸建てられたため、商店街は急速に整備、発展していきました。アメリカ文化の影響は、町全体を包み込むようにして広がり、活気が出てきました。

【昭和時代】



水遊びでにぎわう永田橋上流の多摩川(昭和２年)

米軍機がずらりとならぶ横田基地(昭和22年)

福生町広報

伸びゆく福生町

広報発刊によせて

初めて発刊された福生町広報(昭和32年)

福生駅前通り(昭和35年ころ)

市制施行を祝う児童たち(昭和45年)

時を同じくして、福生の復興へ向けて、福生・熊川青年団が再建に立ち上がりました。日本全体が、男女同権、労働者の団結、教育の自由など、新しい時代の幕開けに不安と期待を抱いていたさなかのできごとだっただけに、青年団の活動がＮＨＫラジオで放送されたこともありました。

昭和22年には六・三制の実施で福生中学校が開校、小学校には「母の会」も発足し、早くも学校給食が始まっています。この年の人口は１万4066人(男8037人、女6029人)、2300戸と戦後になってから、急速に人口が増えているのがわかります。

人口の増加に比例して、学校校舎の新築、福生病院の開設、婦人会の発足、鉄道・バスの増設整備、道路の整備、上下水道の整備など、町としての必要な機能の拡充を急ぐとともに、新しい都市への環境づくりが急ピッチで進められていきます。一方で、農業は年々縮小されていきました。

昭和30年代に入ると、高度成長期時代を迎え、人々の暮らしも上向きになってきます。ちなみに昭和30年の国勢調査によると、町の人口は１万9096人、4137世帯に増え、町の基盤となる諸設備に加え、文化面に対しての要望も高まってきました。町民運動会、福生七夕まつりをはじめ、多くのスポーツ大会、文化的行事が開催されるようになり、その数は年々増えていきました。これにともない、文化施設もつぎつぎと誕生していきます。

32年９月には「福生町広報」も創刊されるようになります。広報には、新しい街づくりの施策の詳細な報告が満載され、行政と町民のコミュニケーションを図るうえで大切な潤滑油の役割を果たすようになります。

同年、福生、羽村、瑞穂による福生都市計画区域が決定されましたが、実際に本格的な都市整備は昭和37年から行われ、首都圏整備法により市街地開発区域の指定を受けます。このころから、“基地の町”からの脱皮が真剣に考えられるようになります。

また、地方から首都圏への人口の流入は激化し、首都圏へのアクセスのよい福生への転入者も多くなってきました。昭和38年10月には熊川南地区に東京都住宅供給公社福生住宅ができ、15棟592戸が入居しました。これを機に福生はベッドタウンとして発展の一途をたどることになります。これは、基地とは別の独自の街づくりへと前進する転機の訪れといってもよいでしょう。

やがて、住むための街づくりのために、生活改善センター、電報電話局など、日常生活に欠かせない施設が次々とオープンし、さらに39年10月にはごみの収集処理も行われる

新しくなった福生駅橋上駅舎、自由橋(昭和61年)

ようになりました。また、昭和39年1月には役場が新築され、小学校も防音設備を整えるために改築が進められるなど、施設づくりにも快適性が追求されるようになります。

経済の主体が第一次産業から二次、三次産業へととって変わった40年代には、人口が急激に増加。都心へ通勤するサラリーマン世帯が増え、駅前広場の整備がなされ、41年12月には福生発の東京直通電車も運行されるようになりました。

昭和40年の国勢調査によれば、人口は3万575人と急激な増加をみせ、幼稚園、学校などの教育施設の新設が町の重要課題になってきました。42年には東京都住宅供給公社加美平住宅の完成により、1042世帯が新しい住民として加わり、さらに人口は増えていくことになります。

首都圏各地でこのような急激な人口増加現象がみられ、昭和43年6月、人口3万人以上を抱え、市との行政格差に悩む全国の33の町が「新市制全国期成会」を結成。地方自治法の市制施行の人口要件を3万人以上に改正することを目的に、2年間にわたって運動を続けました。その改正法案が45年3月に国会で可決されたため、福生町でもその気運はより一層高まり、同年7月1日「福生市」が誕生しました。

市としての施策は、快適な暮らしを一個人からさらに全市的に広げていくことに重点がおかれました。46年には福祉会館へ行くお年寄りに送迎バスを運行するなど、福祉面に力を注ぎ、さらに新旧住民の交流を図ろうと、“ひと声運動”を行いました。福生市の新しい民謡「福生よいとこ」や「ほたる小唄」もつくられ、夏祭りは全市民をあげての交流の場となりました。

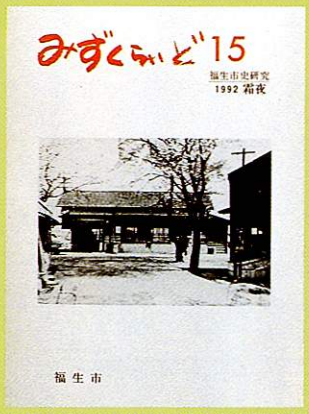
都市計画法による計画的な街づくりも同時に行われるようになります。乱開発による人口増加を防ぐための規制、自然環境の保護育成などにも力を入れるなど、ソフト面への施策も講じられるようになりました。また、昭和48年のオイルショックは、資源の見直しやものへの価値観を見直すよい機会となり、自然とのふれあいや地域コミュニティをテーマに、市政も取り組まれるようになりました。

科学技術の進歩にともない、施設面の拡充が行われ、福生市はハイレベルの設備を誇っています。今後は、国際化、高度情報化、高齢化など、ますます複雑になってきた現代社会において、人、自然、文化が調和し、心のふれあいを大切にできる街づくりが大きなテーマです。21世紀に向けて、福生に暮らすみんながアイディアを出し合い、力を合わせ、真に豊かな街を築いていく時代を迎えています。

みずくらいど小史

難産の末生まれた型破りの市史研究誌「みずくらいど」の誕生秘話をお伝えしましょう。市史は専門家に任せておけば難なくできあがります。しかし、市史はここに住む市民が参加して歴史を掘り起こしてこそ意義があるという編集委員会の意気込みが、市民との交流誌というスタイルをつくり上げました。

論文形式をやめて、内容は市民から原稿を募集する形をとり、デザインも誰もが気軽に手にとれるよう工夫を凝らしました。が、肝心の誌名がぎりぎりまで決まりません。「福生市史研究では堅すぎる。市民に親しまれている名まえをつけたい」と編集委員会のスタッフは悩みました。玉川上水の開削の際、水が砂利に食べられたという伝説の水喰土(みずくらいど)が候補に。食べられた水は、地下水となり、先人の命の糧になったにちがいない、「歴史も地下水となって伏流する」という言葉ともぴったり合うとのことから「みずくらいど」に決定。ようやく発刊に至ったのです。



市民の力でつくりあげた市史研究誌「みずくらいど」